

日本学術会議 国際対応分科会 自己点検報告書

国際対応分科会(小委員会)名 IUHPS分科会

更新日 2009/7/17

(2009/05/01の形式)

国際学術団体に関する事項

国際学術団体名

(和文) 国際科学史・科学基礎論連合：国際科学史部門

(欧文) International Union of the History and Philosophy of Science/Division of
History of Science and Technology

(略称) IUHPS/DHST

日本学術会議加入年(西暦) 1950 年

運営組織の名称・役員の構成等

運営組織の名称(欧文) Council

	会長	会長代理/次期会長	副会長	事務局長
(氏名)	Ronald NUMBERS		LIU Dun, Fabio BEVILACQUA	Efthymios NICOLAIDIS
(国)	USA		China, Italy	Greece

役員選出方法の概要(120文字程度で記載)

4年ごとに選出するが、候補選定委員会が提示した候補者と総会で各国が推薦した候補者を合わせて、その中から総会で選挙。なお、候補選定委員会には、各国は候補者を推薦することが出来る。

加入国・地域の数 49 ヶ国

主要加入国(10ヶ国程度を列举)

英、米、仏、独、ロシア、イタリア、スペイン、日本、中国、インド、カナダ、

国際学術団体のホームページURL <http://www.dhstweb.org/>

国際学術団体の年間運営経費 4300Euro

日本の分担予定額[事務局で記入] 259千円(2012年度)

国際学術団体の活動状況

総会・学術研究集会の開催状況(過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載)

開催年 (西暦)	会議の名称	開催地	参加者数	日本からの 参加者数	学術会議共催/ 協賛の有無
2005	第22回国際科学史 会議	北京市	1500	80	無
2001	第21回国際科学史会 議	メキシコ・シテイ	920	60	無

運営に関する会議の開催状況(過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載)

開催年 (西暦)	会議の名称	開催場所 (機関等)	参加国数	日本からの 代表者名	学術会議の 代表派遣数
2006	理事会(Council)	アテナ		無し	0
2005	理事会	北京	10	矢野道雄	0

出版物等(主要な定期刊行物・不定期刊行物を刊行頻度とともに箇条書きで記載)

Newsletter : 不定期で発刊、ネット発信し、国際的な活動を各国に情報提供している、
これ以外にもTeaching Group も、Newsletterを発行している

活動状況(各項目につき過去5年間の状況を120文字以内で記載)

<p style="text-align: center;">国際機関等の提唱で行った活動</p> <p>UNESCOやIGSとの連携でOn line 科学史関連文献ネットWorld History of Science Online projectの作成 Joint Session DHST-DLMPs, Paris 17-18 November 2006</p>
<p style="text-align: center;">国際機関等への提言等</p> <p>(1) 2005年第22回国際会議で「北京宣言」を作成、国際的にも国内的、とくに発展途上国での科学史技術史分野での学問的振興に援助するよう提言。 (2) IGSUやUNESCOと連携し、Online で各国の科学史技術史関連の文献を検索あるいは閲覧できるシステムを構築することを提案、一部実現している</p>
<p style="text-align: center;">国際事業等への参加・実施等</p> <p>国際地史学会 (INHIGEO) と連携し、2005, 2006年には2つの大きなシンポを開催。イスラム諸社会の科学史技術史国際委員会にも参加している。これ以外にも国際気象学史委員会等と連携し、共同シンポ等を企画している。</p>
<p style="text-align: center;">全世界的/地域的研究課題への取組み</p> <p>独自のcommission として 東アジア問題を取り扱う分科会 (ISHEASTM) を設置し2005年8月には130名以上の参加者で活動方針討論を行って以後、2006年7月Tuebingenで古代塩産業について、2007年中国で第4回国際会議で古代書物史について、2006年1月のカンボジアでの初の東南アジア医学史会議等々の活動を支援している。またヨーロッパ地域における問題は、たとえば2006年、クラコウ開催の「世界と地域」科学史シンポなどで取り組んだ。</p>
<p style="text-align: center;">発展途上国への対応</p> <p>2005年第22回国際会議で「北京宣言」を作成、国際的にも国内的、とくに発展途上国での科学史技術史分野での学問的振興に援助するよう提言。上欄記載の通り、アジアにおける科学史技術史研究を振興するために、特定テーマを設定してシンポジウムを組織している。</p>

関連学術分野の動向と今後の重要課題(120文字以内で記載)

<p>研究動向は、近年、時代的には19世紀における諸問題から20世紀の科学史技術史研究、そして冷戦期や第2次世界大戦後の研究にシフトしているようにみられる、そして途上国における発展を含め全世界史的視野からの科学史技術史展開の研究が重要視されている。その関連で、発展途上国の見直しも課題となっている。</p>

国内における国際学術団体への対応状況

国際学術団体の役員就任状況(過去10年間・新しいものから遡って5件まで記載)

国際学術団体における 役職名	氏名	任期	
		開始年	終了年
assessor	矢野道雄	2005	2009
assessor	佐々木力	1997	2005
assessor	伊東俊太郎	1989	1997

学術会議の国際対応分科会(小委員会)名 IUHPST分科会

学術会議以外の国内対応組織・委員会等

特にないが、国際会議開催毎に個別学会で対応の委員会等を臨時に設置している例も見られる。

国内の関連学協会等の状況(主要なもの5件まで記載)

学協会の名称	会員数	学協会のホームページURL
日本科学史学会	1060	http://wwwsoc.nii.ac.jp/
科学基礎論学会	450	http://phsc.jp/
産業考古学会	600	http://www.ricoh.co.jp/
化学史学会	310	http://www.ricoh.co.jp/
日本産業技術史教育 学会		http://homepage3.nifty.com/

学術会議の国際対応分科会(小委員会)の活動状況

学術会議の国際対応分科会(小委員会)名
所属分野別委員会

IUHPS分会
史学

分科会(小委員会)の構成

委員長	副委員長	幹事	
木本忠昭	矢野道雄	横山輝雄	

会員数	連携会員数	特任連携会員数
0	4	4

分科会(小委員会)の活動方針(箇条書きで120文字以内で記載)

2009年に第22回国際科学史会議がブタペストで開催されるので、同会議に日本からの学術報告や参加を促進、日本での研究を国際的活動に反映させるとともに、国際交流を図り、世界の研究動向を国内に反映させる活動を行う。組織としての具体的な対応としては、活動報告を作成し、また会議後には会議報告書を作成する。役員人事にもしかるべきポストで活動できることを目指す。

今期の会議開催状況(開催日時の新しいものから遡って6回まで記載)

会議開催日時 (2009/05/01の形式)	主な審議事項・議題等
2008/12/19	(1) 国際組織役員推薦の件：矢野道雄をアセッサーに推薦することとした、(2) 代表派遣の件：木本忠昭を決定、なお適任者を推薦する(3) 報告書作成の件：ブタペスト会議に提出することとした、(4) 今後の対応：科学史学会と連携して対応することとした、(5) その他：国際会議後、報告書を作成することとした
2009/5/23	代表派遣を橋本毅彦、矢島道子の両名を事後承認した。総会での表決権行使者として、木本、橋本、溝口、矢島、小川の5名とした。総会への報告書、分担金への対応については委員の意見を委員長がまとめ提出することとした。

日本における国際学術団体の活動の周知・広報の状況(箇条書きで120文字以内で記述)

科学史、技術史の研究者は、基本的に日本科学史学会を母体にして活動しているので、に同学会の発行している「科学史通信」に、その都度、動向を報告している。また、国際会議・総会での議論の動向等については、会議毎に小冊子で報告書を作成してきている。

国際対応における国内学協会との連携状況(箇条書きで120文字以内で記述)

日本科学史学会と、対応委員会を構成して検討することとしている。対応委員会では、これまで、国内における研究活動の国際的紹介として、機関誌『科学史研究』および『Historia Scientiarum』の概要説明パンフレットを作成配布するなどとともに、若い研究者が国際活動を積極的に展開するための援助として、諸説明会や発表のための助言等を行っている。また終了後は報告集を発行し、国内に国際動向を知らせている。

特記事項・国際委員会による指摘事項等への対応状況(箇条書きで120文字以内で記述)

(1) DHSTとDLMPs の連携については、本委員会だけでは対応できない問題であるので、両国再組織での検討にまわっている (2) 国内への連絡先の記述の仕方については、委員会の理解と指摘が必ずしも正当とは思えない点もあるが、是正を申し入れることとした。

分科会・小委員会活動の自己評価等(箇条書きで120文字以内で記述)

(1) 国際組織への対応:ここ10年、国際組織へは役員としてassessorを継続的に送り出す活動をし、成功してきている。(2) 4年ごとの国際会議への学術的貢献についても、シンポを積極的に組織するなど一定の貢献をしてきたと評価できる。(3) 国際会議の総会での議論でも、前回北京総会では若年研究者への補助金のための参加費値上げ額決定についても率先して提案した、(4) 国内での対応体制については、国際会議の動向について、報告集を発行したり、科学史学会の全体委員会および年総会では必ず報告しており、活動を反映する活動は積極的に行ってきたと評価している。